

# 宮田直彦のエリオット波動レポート

## マーケット見通し(短期アップデート) 2 月 13 日 9:21AM 更新

(おしらせ)次回レポートは 2 月 25 日(水)のリリース予定です。

### [日経平均]

【当面の想定レンジ】 46,000～58,500 円

### [NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】 (NY ダウ) 47,000～50,500 ドル  
(S&P500) 6500～7000

### [ナスダック]

【当面の想定レンジ】 (ナスダック 100) 22,500～26,000  
(ナスダック総合) 20,500～24,000

### [米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000～160.000 円

### [ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 95.000～102.000

エリオット波動とは

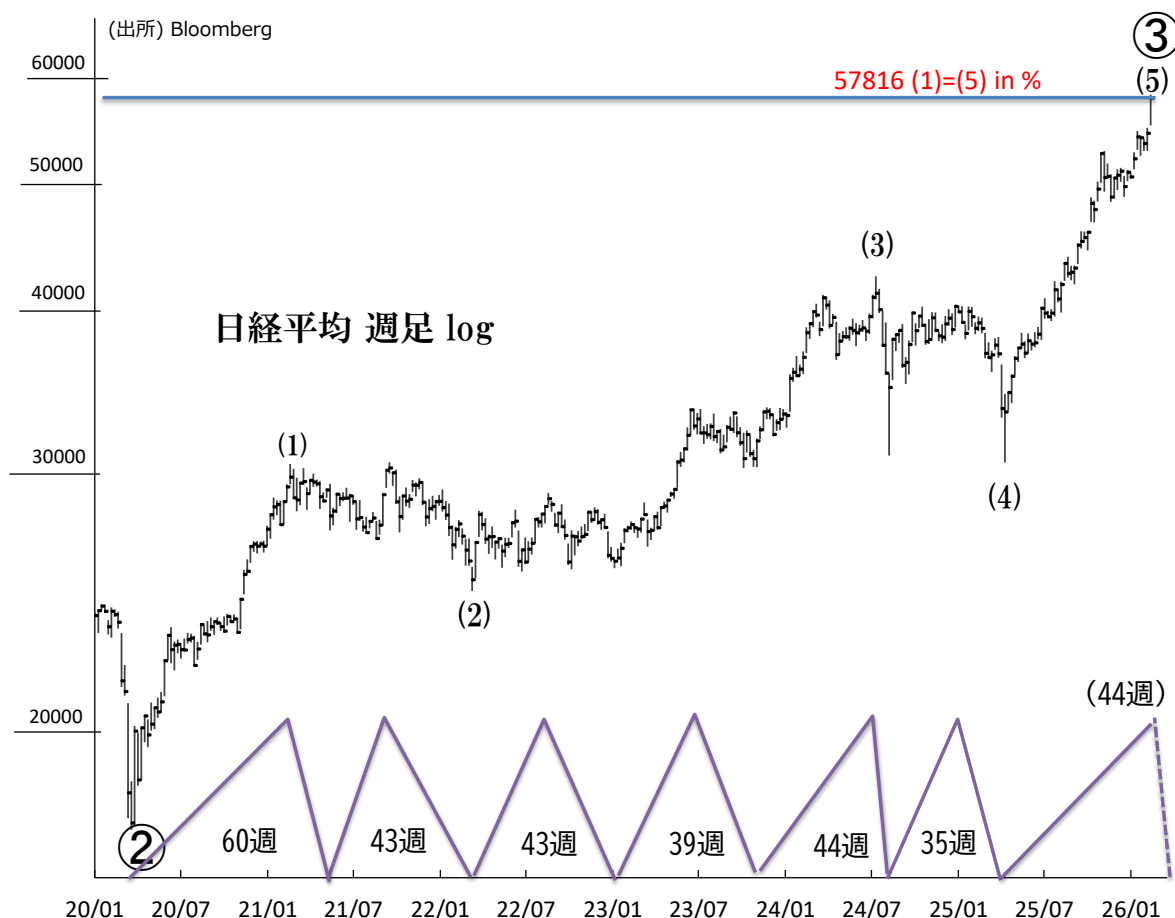
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は 5 つの上昇波と 3 つの下降波（合計 8 つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

# 日経平均・TOPIX



## 【週足 エリオット波動分析】

2025 年 4 月 安値 (30,792.74 円) を起点とするインターミディエイト級第(5)波ラリーは、いつ終わってもおかしくありません。プライマリー級④波による調整は近く、コロナショック以来最大のリスクオフ局面の開始に備えるべきでしょう。

(最高値を付けた)2 月第 2 週は、25 年 4 月底から 44 週目です。週次の安値サイクル(安値～安値)が 42 週±7 週(35 週～49 週)であることからすれば、(高値ではなく)安値を付けるべき時間帯に入っています。

コロナショック底(16,358 円)からの最初の上昇・インターミディエイト級第(1)波を振り返ってみると、高値(30,714 円)までの通算上げ幅(率)は 14356 円(87.76%)、上昇期間は 48 週でした。このように、上昇期間が異例の長さであったため、サイクル全体の期間は 60 週(上昇 48 週+下落 12 週)に伸びました。

第(5)波が第(1)波と同じ 48 週間上げるとすれば、「高市ラリー」は 3 月第 2 週まで続くことになります(もちろん必然性はありません)。

水準面に関してですが、2 月 12 日高値 58,015 円は、第(1)波と第(5)波が同じ上昇率になる水準 [57,816 円]を少し超えました。もっとも終値(57,639 円)では節目を超えていません。

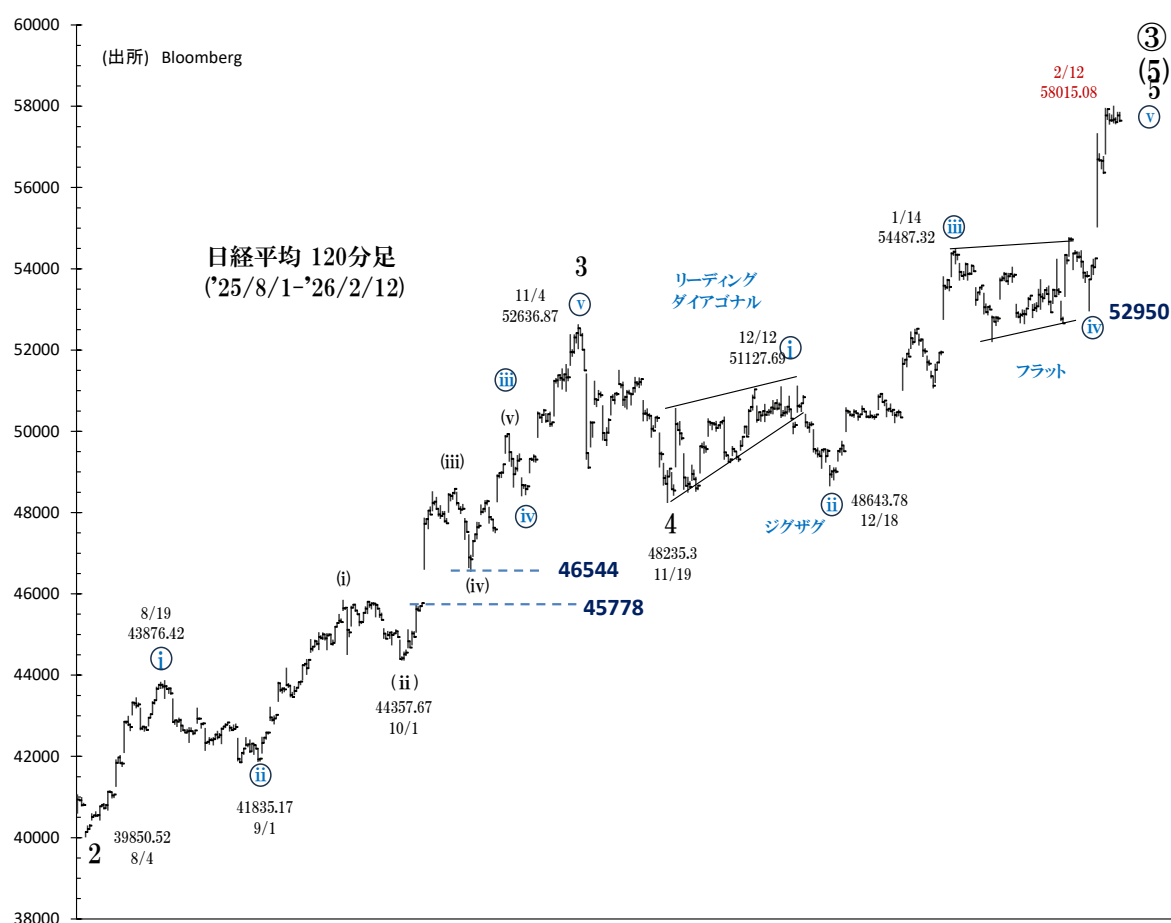


## [TOPIX]

2月12日には一時3888と4日連続で史上最高値を更新しました。

3507(1/29 安値)からの上昇は第5波中マルv波、上昇トレンド「最終の最終波」に当たります。

2月6日～9日のマド埋め(3699)が、トレンド転換の最初のシグナルとなるでしょう。プライマリー④波による調整は、短期的に始まってもおかしくありません。



### [日経平均]

昨年 11 月安値(48,235 円)を起点とする上昇は、マイナー級第 5 波です。第 5 波のマル ii 波「ジグザグ」に対し、同マル iv 波は「フラット」で応じています(オルタネーション)。

52,950 円(2/6 安値)からの上昇は、マイナー級第 5 波における最終波[5 波-マル v 波]に相当します。

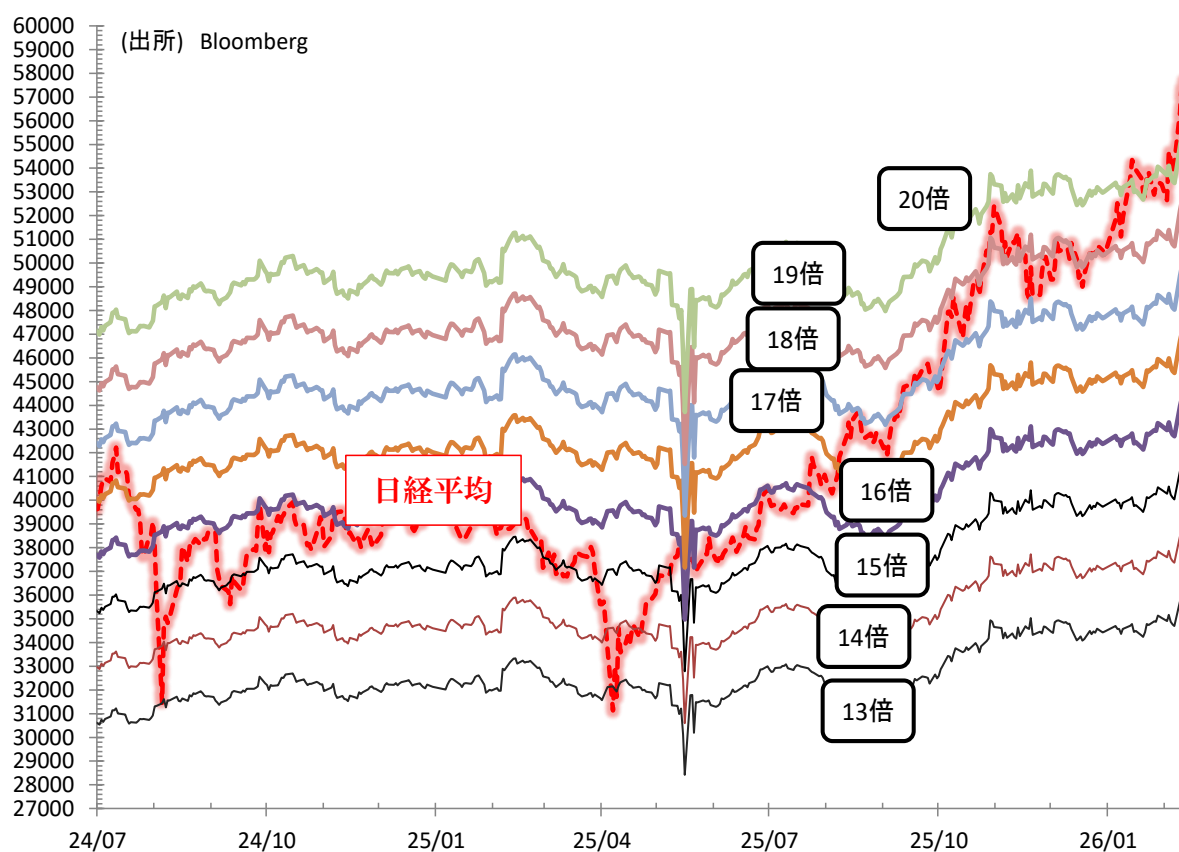
日経平均の総合かい離(※)は、2 月 10 日に 48.62%に広がりました。これは昨年 10 月 31 日の 57.7%に次ぐもので、過去を振りかえっても数えるほどしかない「超過熱」ぶりです。それに対する反動安は短期的にも起きるでしょう。

※日経平均と三種の移動平均線 (25 日 MA、75 日 MA、200 日 MA)からのかい離合計。

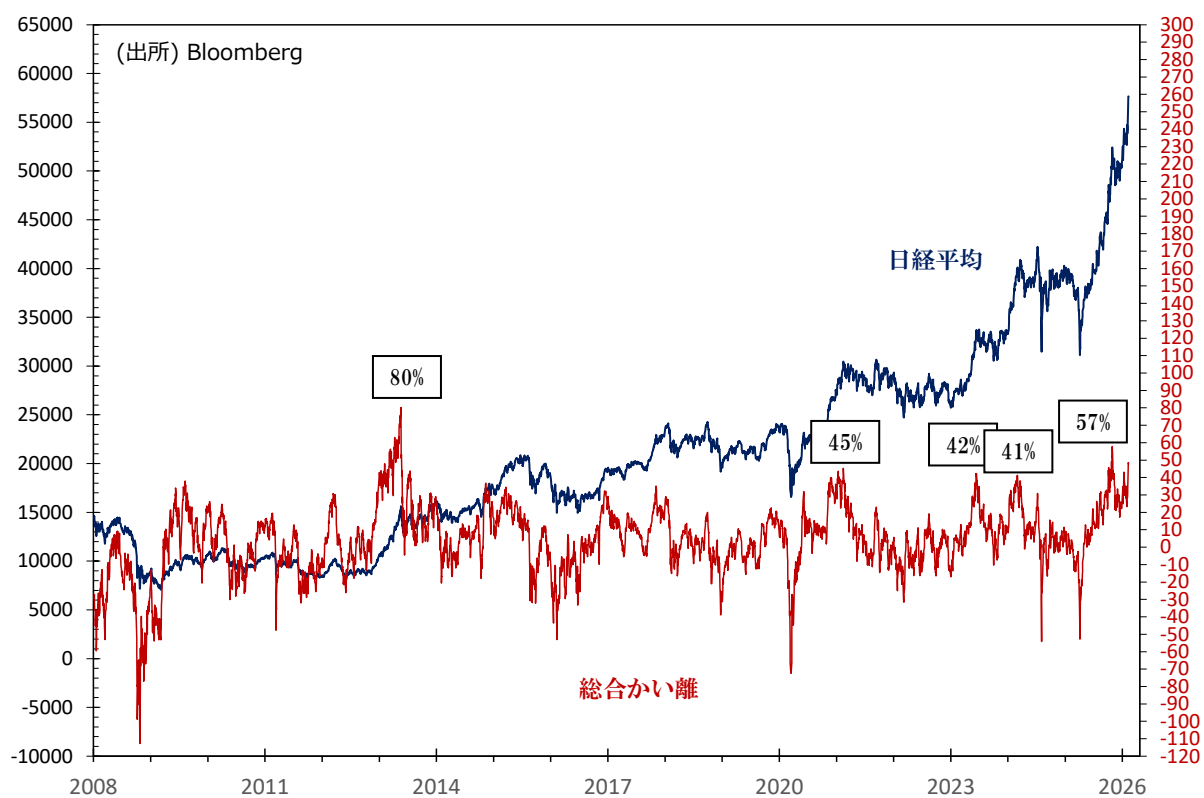
2 月 6 日-9 日のマド[54,253 円-55,018 円]を埋めると、プライマリー第④波へのトレンド転換が示唆されます。

### [予想 PER 別の日経平均水準]

2 月 12 日の日経平均予想 PER は 20.88 倍、予想 EPS は 2760 円です。なお 2 月 10 日に予想 EPS は 2767 円と過去最高を記録しています。



## [日経平均総合かい離]



## NY ダウ・S&P500



### 【NY ダウ 日足エリオット波動分析】

2025 年 11 月安値 (45,728 ドル) からの上昇は、25 年 4 月以来の上昇第 (5) 波における最終波・第 5 波とカウントされます。

年初から高値圏での保ち合いが続いてきましたが、これは第 5 波中マル iv 波に相当します。このマル iv 波は 48,829 ドル (2/5 安値) で完成し、そこからは、保ち合い上放れ局面 (マル v 波) に移行しました。

2 月 10 日は一時 50,512 ドルへ上昇しました。ただし、この NY ダウの最高値更新の動きに、S&P500、ナスダックなどは追随できていません (未確認)。これは NY ダウのピークアウトを示唆するものといえます。

48,829 ドルを下回ると、本格リスクオフ局面入りのシグナルが点灯します。



### 【S&P500 日足 エリオット波動分析】

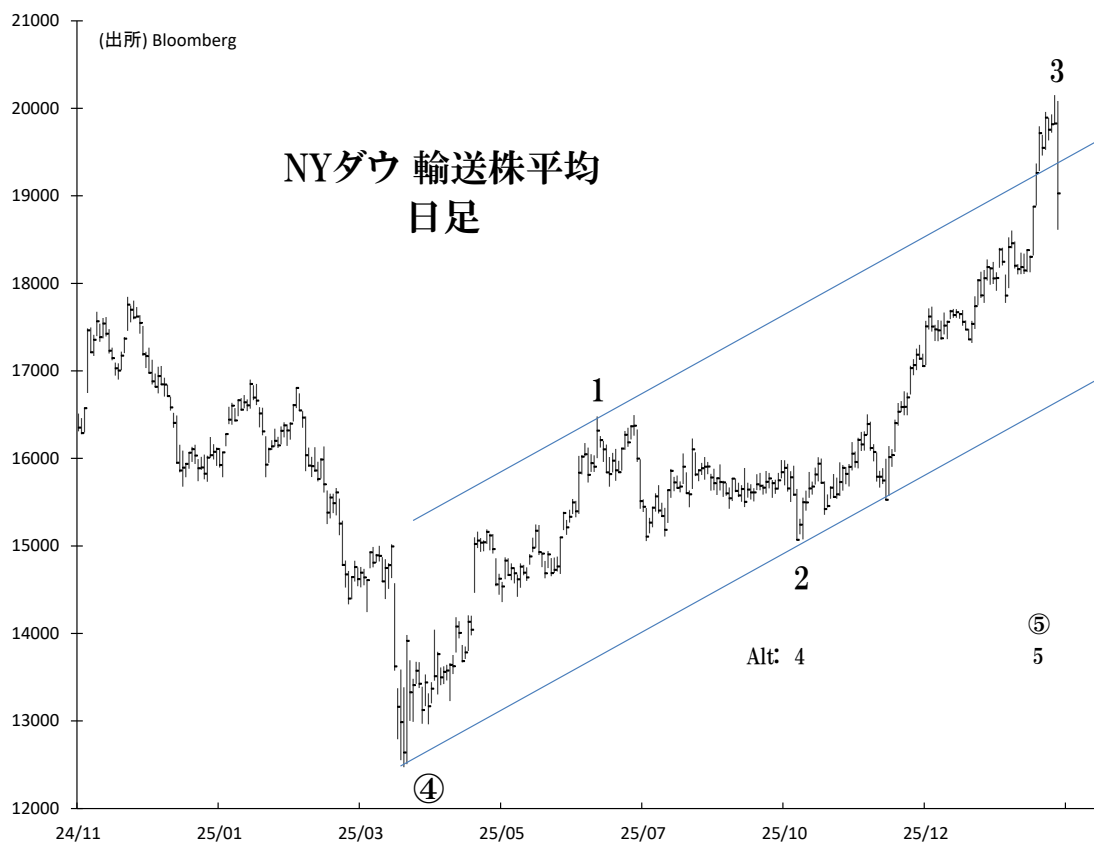
6521(11/21 安値)からの「エンディング・ダイアゴナル」は、7002(1/28 高値)を以て完成した可能性が高い、とみています。

短期的には 6780(2/5 安値)を下方ブレイクするかが注目されます。

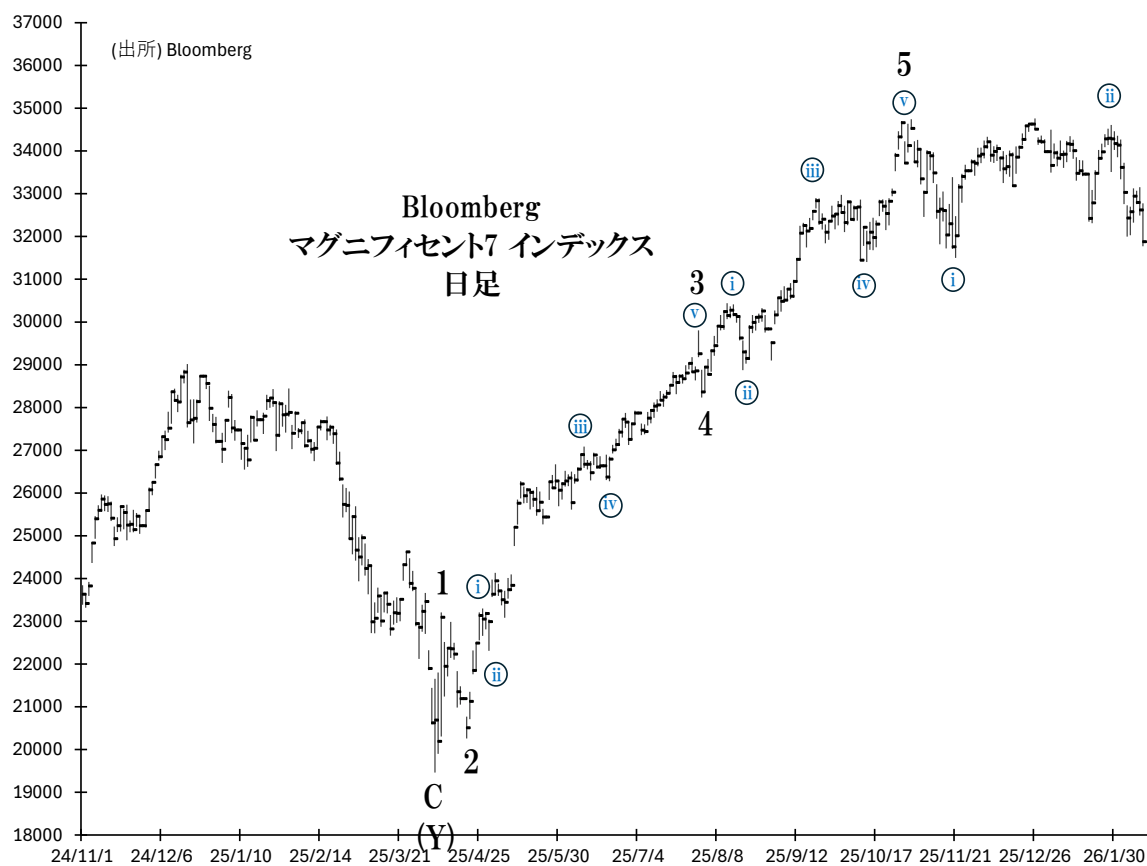
6780 をブレイクすれば、ダイアゴナル下限からの下放れが鮮明になります。この場合 S&P500 は、ダイアゴナル始点・6521 へ—この近くに 200 日 MA があります—速やかに下落する展開が想定されます。

その反面、7002 を上回る場合は代替波動カウントを検討します。

[ダウ輸送株平均] 第3波は終了したとみられる

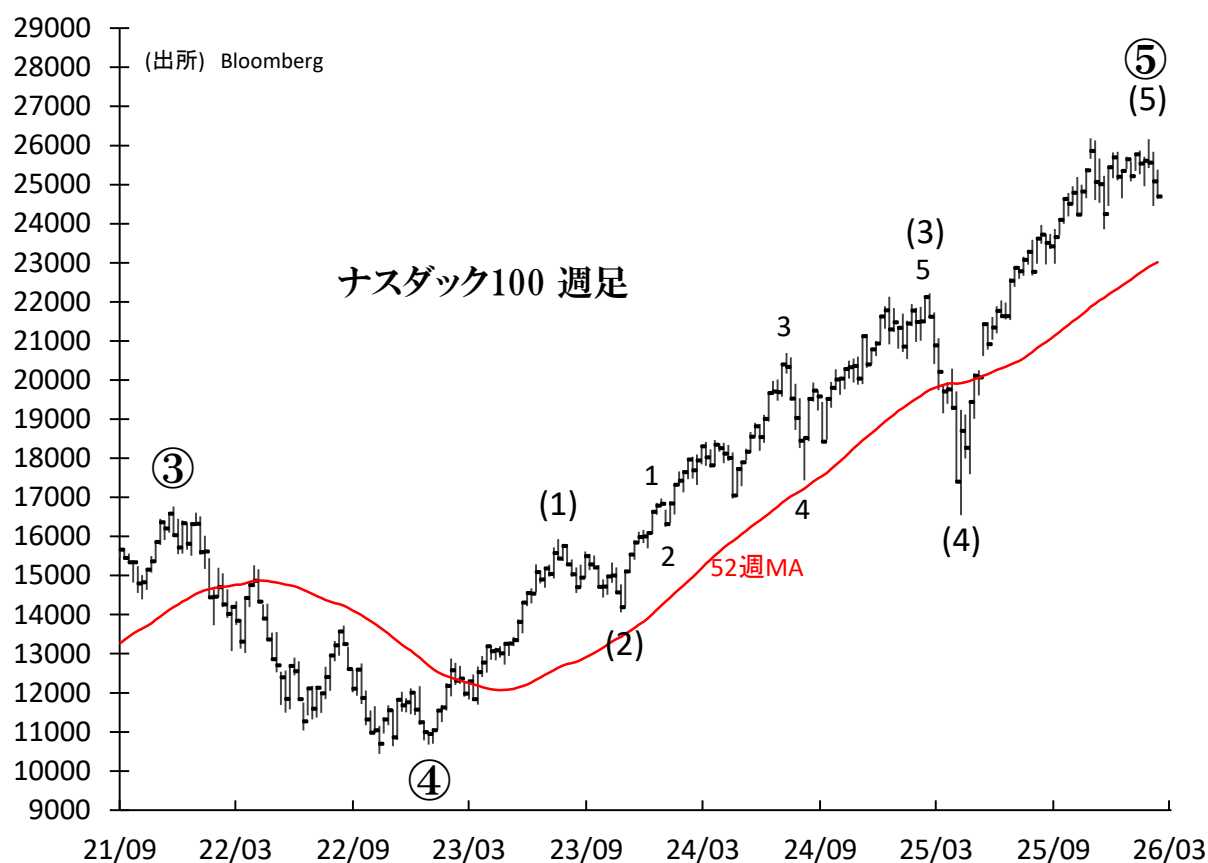
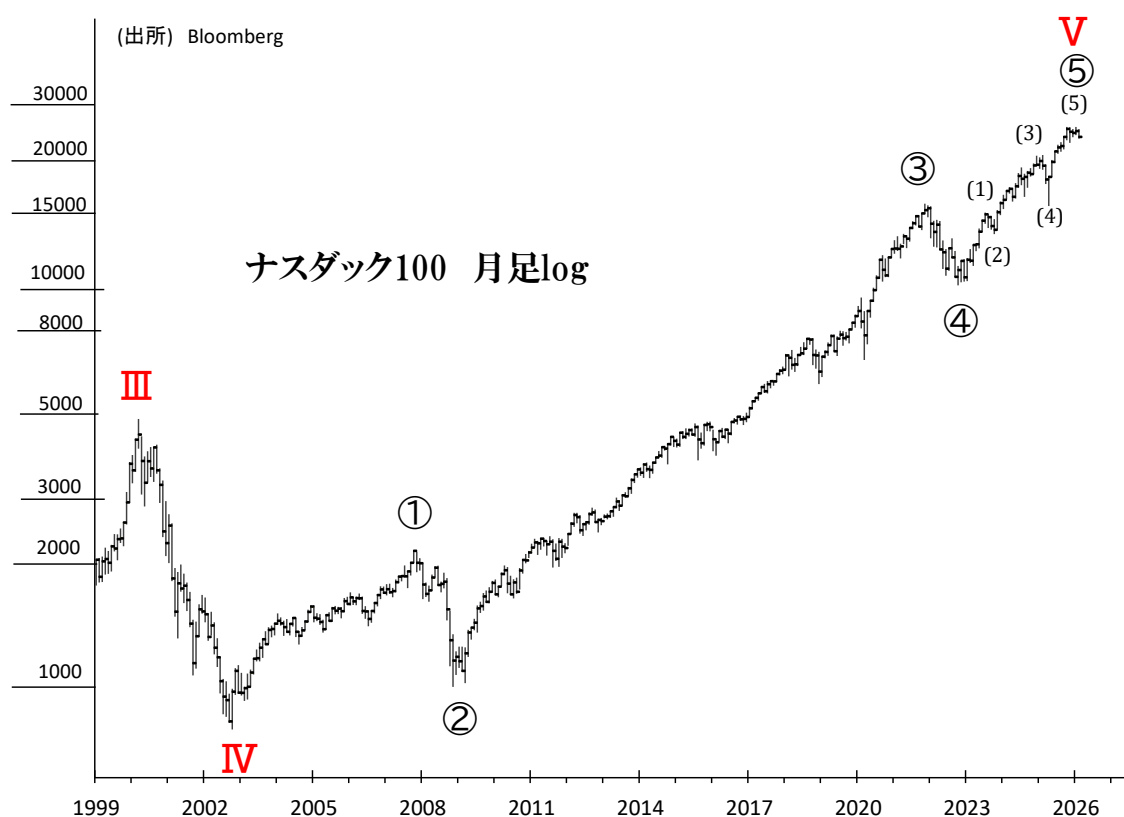


[マグニフィセント7] 弱気トレンド開始へ?





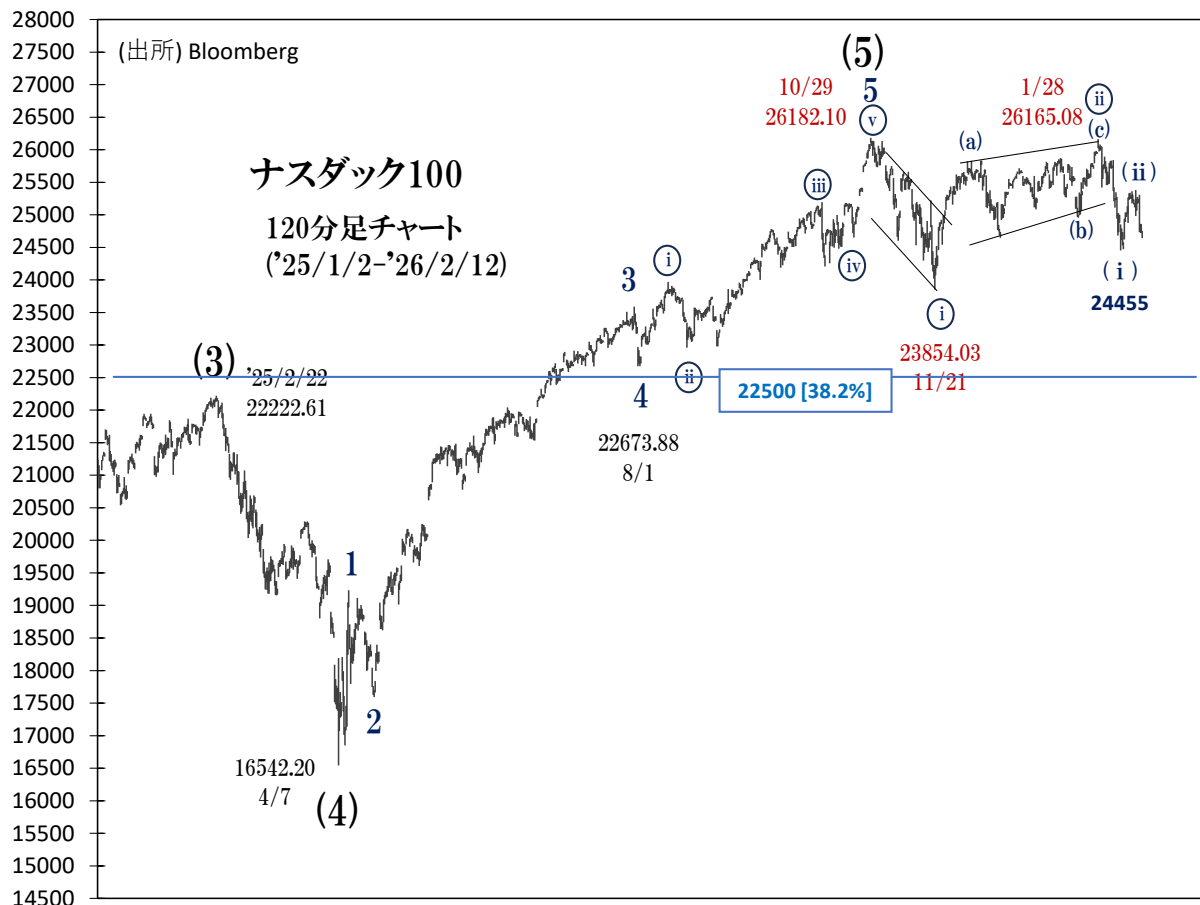
## ナスダック 100



### 【ナスダック 100 月足・週足 エリオット波動分析】

2002 年 10 月底から進行してきたサイクル級の上昇トレンドは、その全行程を終えた可能性があります。2022 年 10 月からのプライマリー級の第⑤波による上昇は、25 年 4 月よりインターミディエイト級第(5)波にあり、それは 26,182(10/29 高値)を以て終わった可能性が高まっています。

米株相場は 2026 年前半に、本格リスクオフ局面を迎えるでしょう。



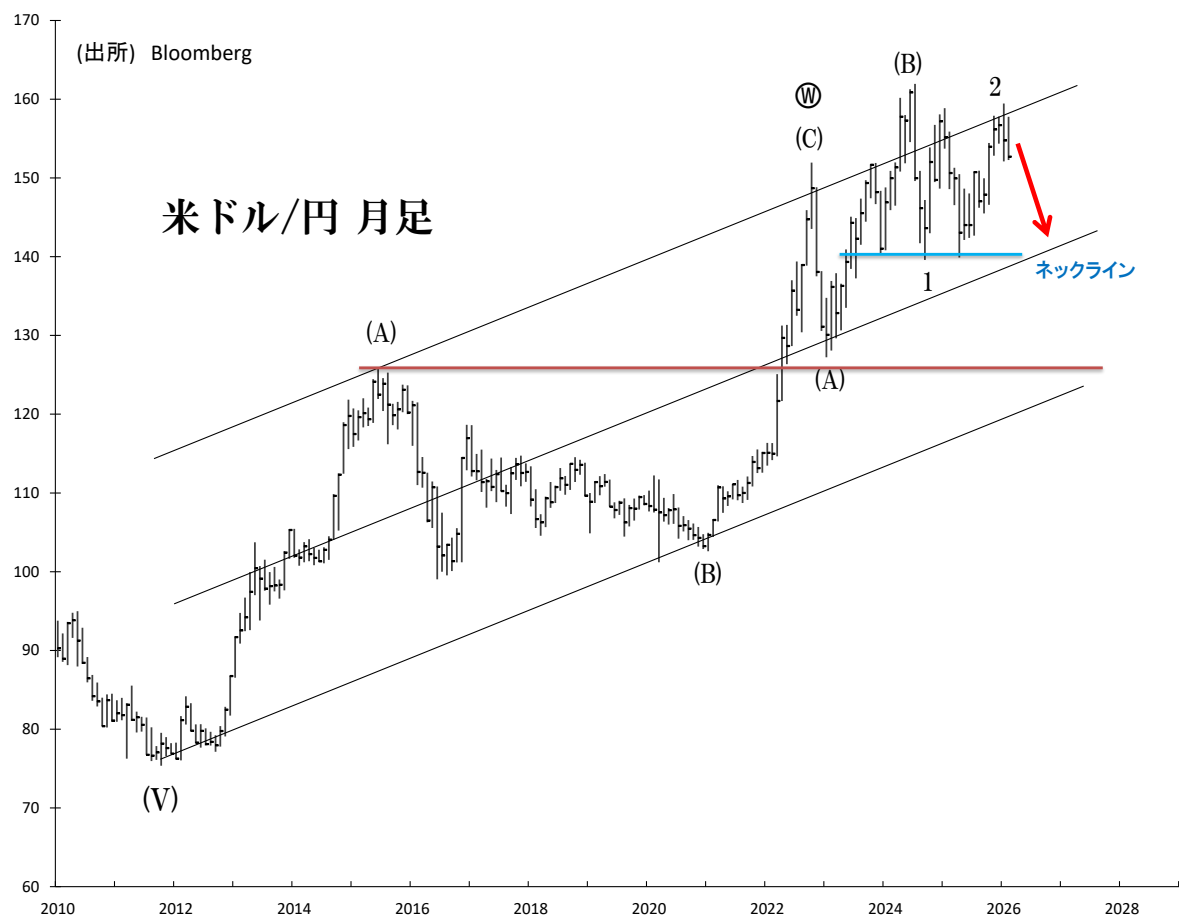
### 【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

昨年 10 月高値(26,182)と今年 1 月高値(26,165)、これらは 3 カ月越しのダブル・トップです。26,165 からマル iii 波による急落局面に入ったとみられます。

マル iii 波中第(ii)波によるリバウンドは、25,382(2/11 高値)で終わった可能性があります、そうであれば、足元マル iii 波中第(iii)波「サード・オブ・サード」による下げに入ったことになり、それは目先のにも 24,455(2/5 安値)をブレイクし、昨年 11 月安値 23,854 も早々に下回るでしょう。

さらには今後数週間タームで、[22,500](昨年 4 月からの上昇の 38.2%押し水準)に達してもおかしくないでしょう。

# 米ドル/円



## 【月足・エリオット波動分析】

16 年半サイクルによれば、米ドル/円(ドル/円)は 2028 年 4 月頃まで「円高の時間帯」が続きます。この時間帯においてドル/円の上値は抑えられるでしょう。筆者は 28 年 4 月頃までのどこかの時点で、1ドル=125 円～120 円へのドル安・円高になる可能性をみています。

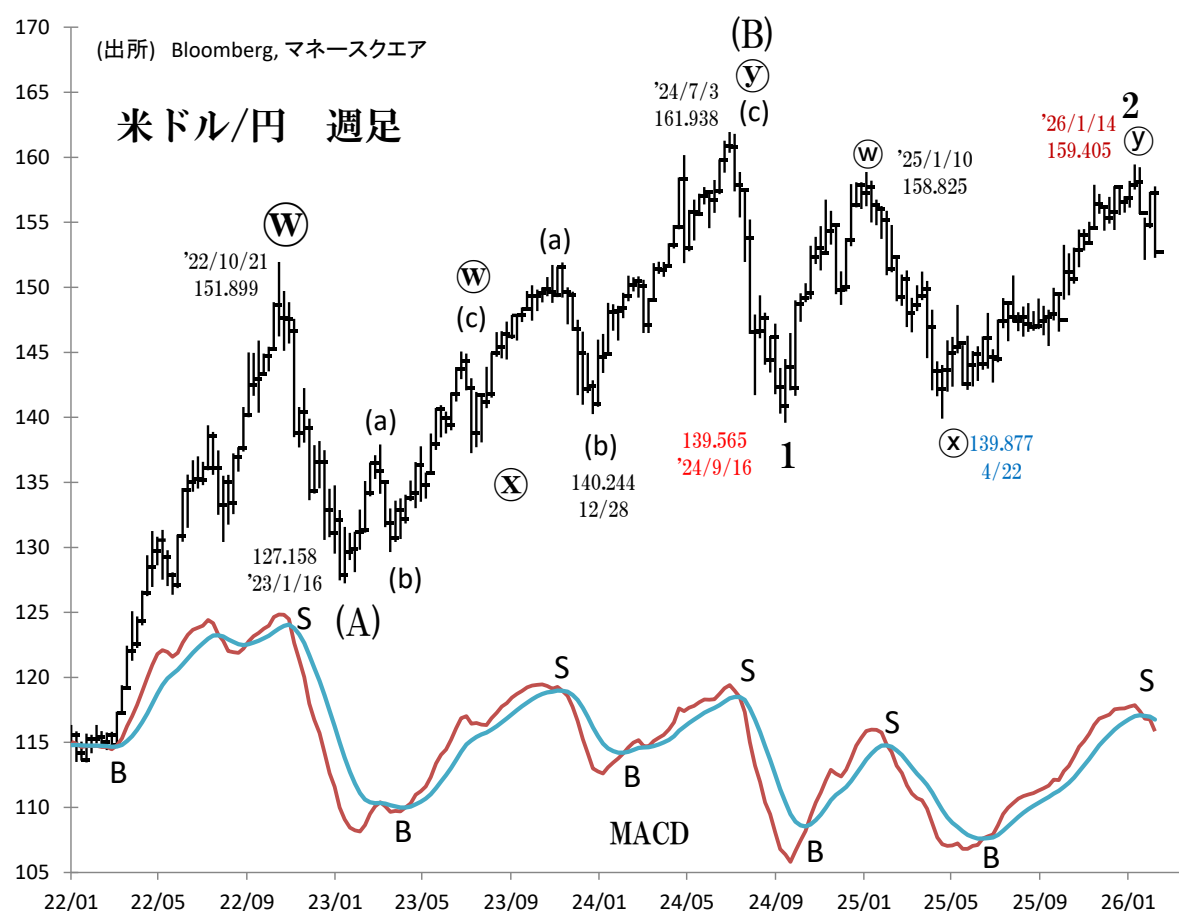
日米実質金利差から導かれるドル/円の水準は、現在 1ドル=138 円-139 円です。足元の日本円は金利差からみた妥当な水準よりも極端な過小評価が続いています。

さらには、日本が「金利ある世界」に入った一方で、実質実効円レートは今なお史上最安値圏にあります。

このような「超円安」を筆者は「円安バブル」とみており、それは今後いつ弾けてもおかしくありません。実際のところ、円安バブル崩壊は足元から始まるかもしれません。

ちなみに「失われた 20 年≡金利なき世界」では、円売りで調達した資金を様々なアセットに投資する円キャリー取引(※)が世界の潮流でした。しかし「金利ある世界」では、円キャリー取引の巻き戻し(円買い戻し)が進むと共に、市場ボラティリティが急上昇するリスクに留意すべきでしょう。

(※)BIS(国際決済銀行)によると世界の円キャリー取引規模は 40 兆円程度とされます。

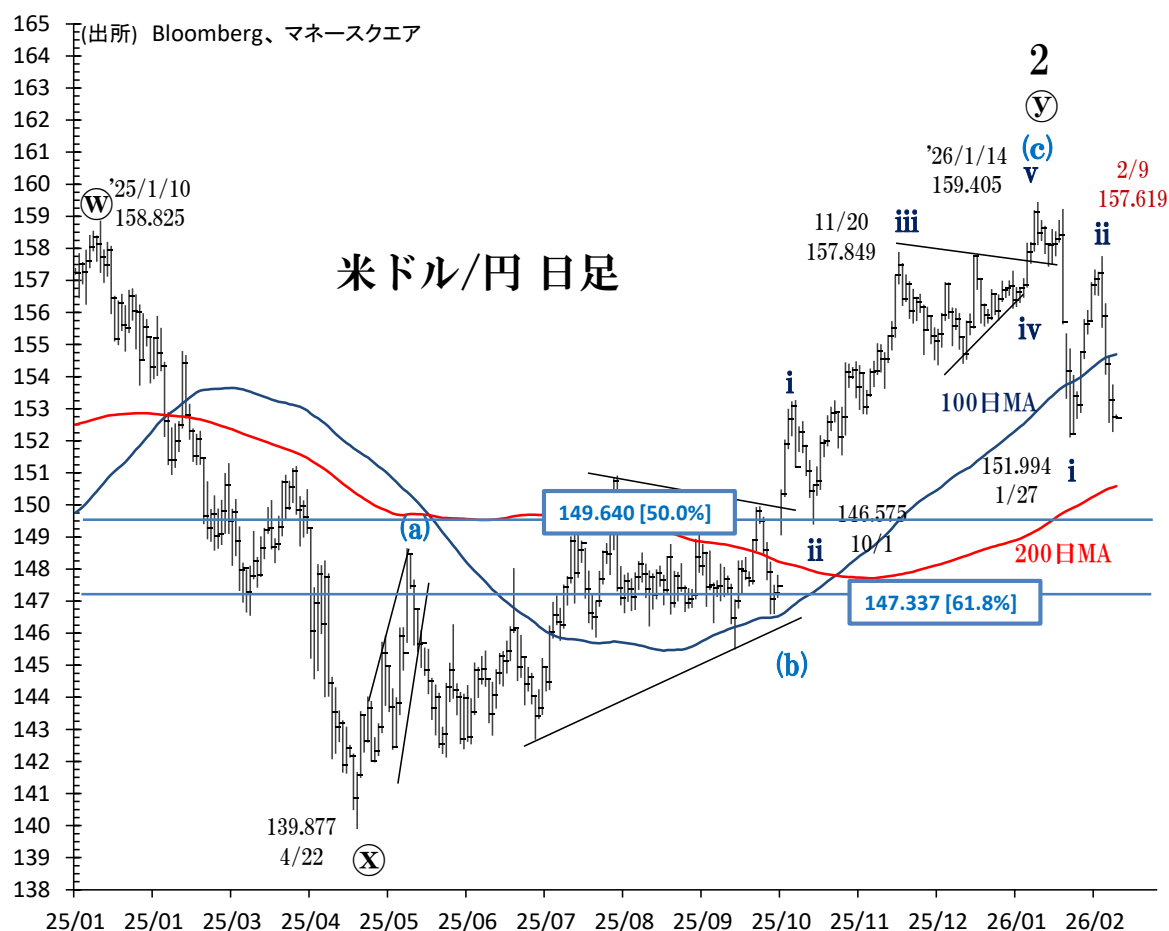


#### 【週足 エリオット波動分析】

24 年 9 月安値(139.565 円)からの第 2 波によるリバウンドは終わり、第 3 波によるドル安・円高がスタートした可能性が高い、とみられます。

週次 MACD は 25 年 6 月下旬に買い(B)となり、そのままドル/円の買い持ちが続いてきましたが、1 月最終週に売りシグナル(S)が点灯し、半年ぶりの弱気転換となっています。

市場価格は第 3 波で強く・大きく動きます。足元のドル安・円高が第 3 波なら、じり安の展開は考えにくい上に、次が「サード・オブ・サード」のドル安トレンドということを考慮すると、今後 2~3 カ月という短期間に 140 円処へ急落する展開もあり得ます。



#### 【日足 エリオット波動分析】

159.405 円(1/14)を起点に、持続的なドル/円下落トレンドが進行中とみています。

157.619 円(2/9)からは第 iii 波の下落が始まった可能性が高い、とみられます。この見方が正しければ、短期的にも直近安値の 151.994 円(1/27)を下回り、200 日 MA(150.590 円)を試すでしょう。

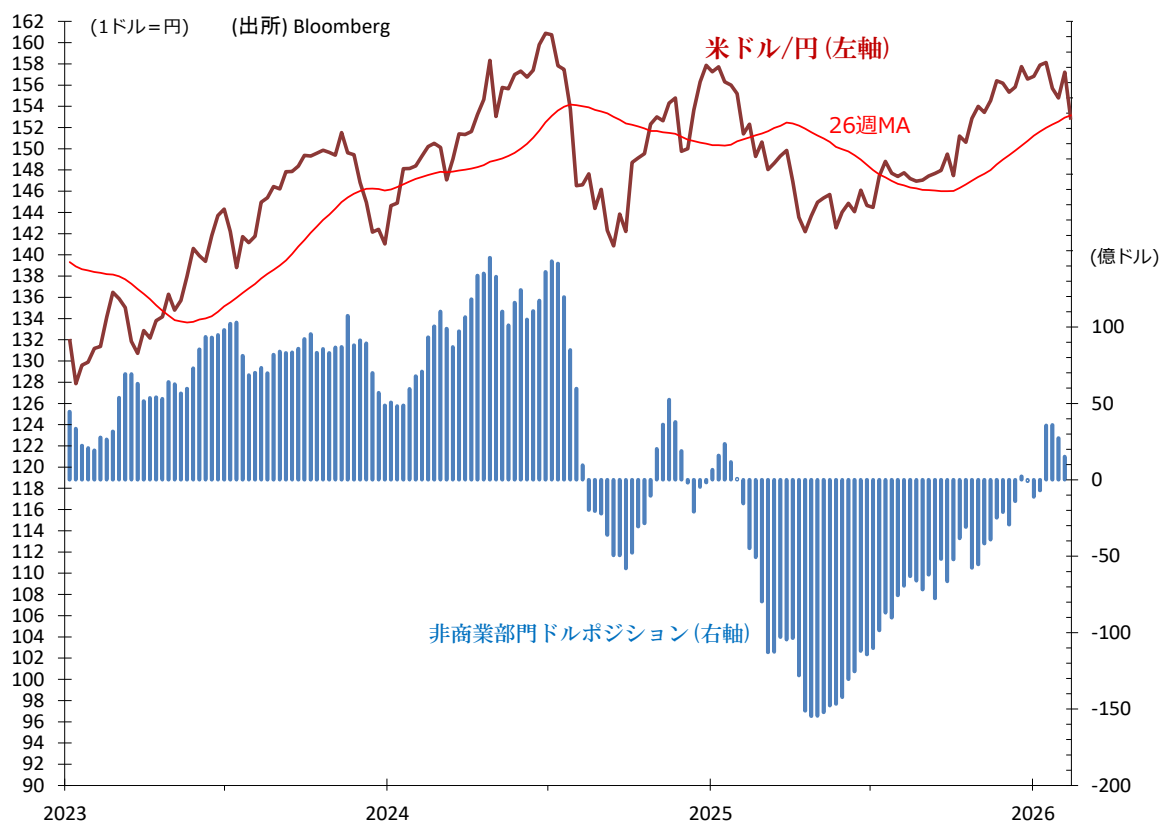
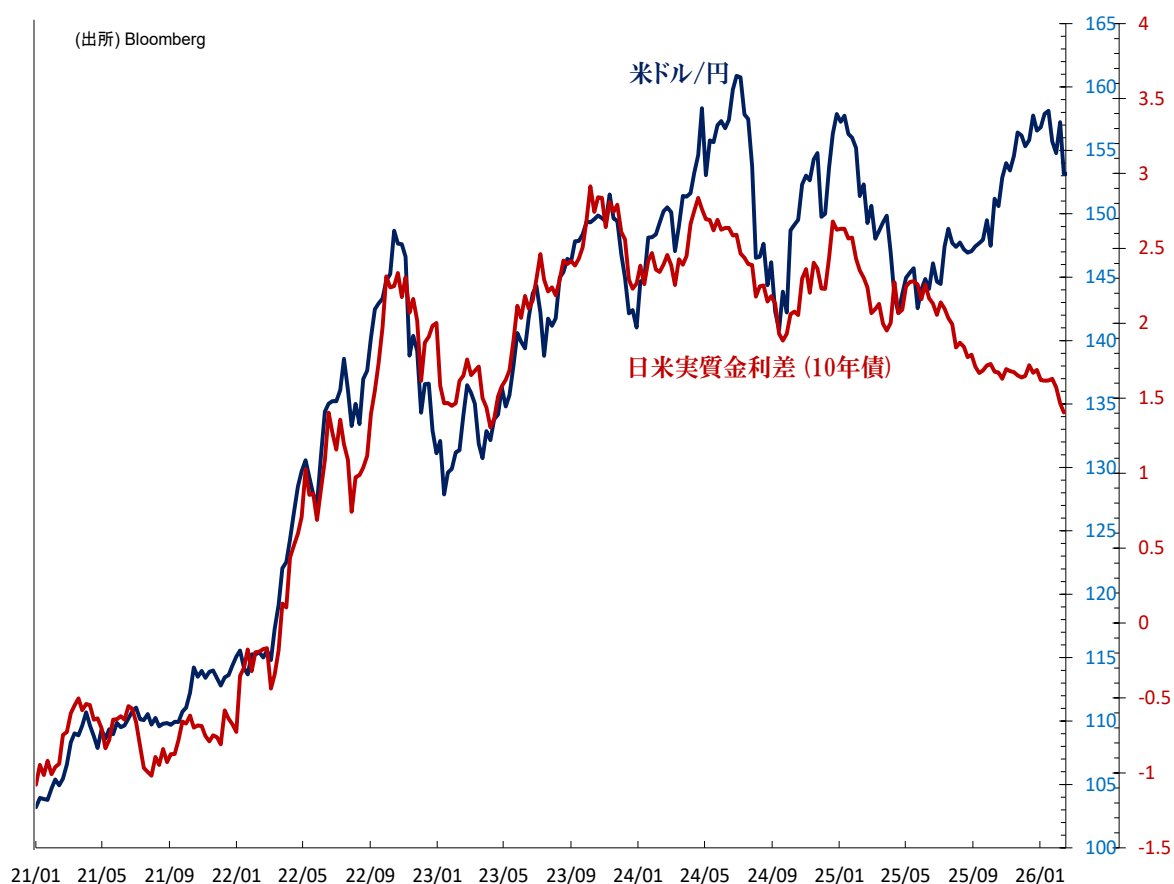
200 日 MA をブレイクすると、次はフィボナッチ比率のレンジ[149.640 円-147.337 円]を打診するでしょう。

#### 金利差からのドル/円推計値

足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[137.694 円]です。

#### 投機筋の円売り持ち高は縮小 (2026 年 2 月 3 日時点)

IMM 通貨先物市場における投機筋(非商業部門)の円売り持ちポジションは、前週の 27.4 億ドルから 15.3 億ドルへ縮小しました。



## ドルインデックス (ドル指数)



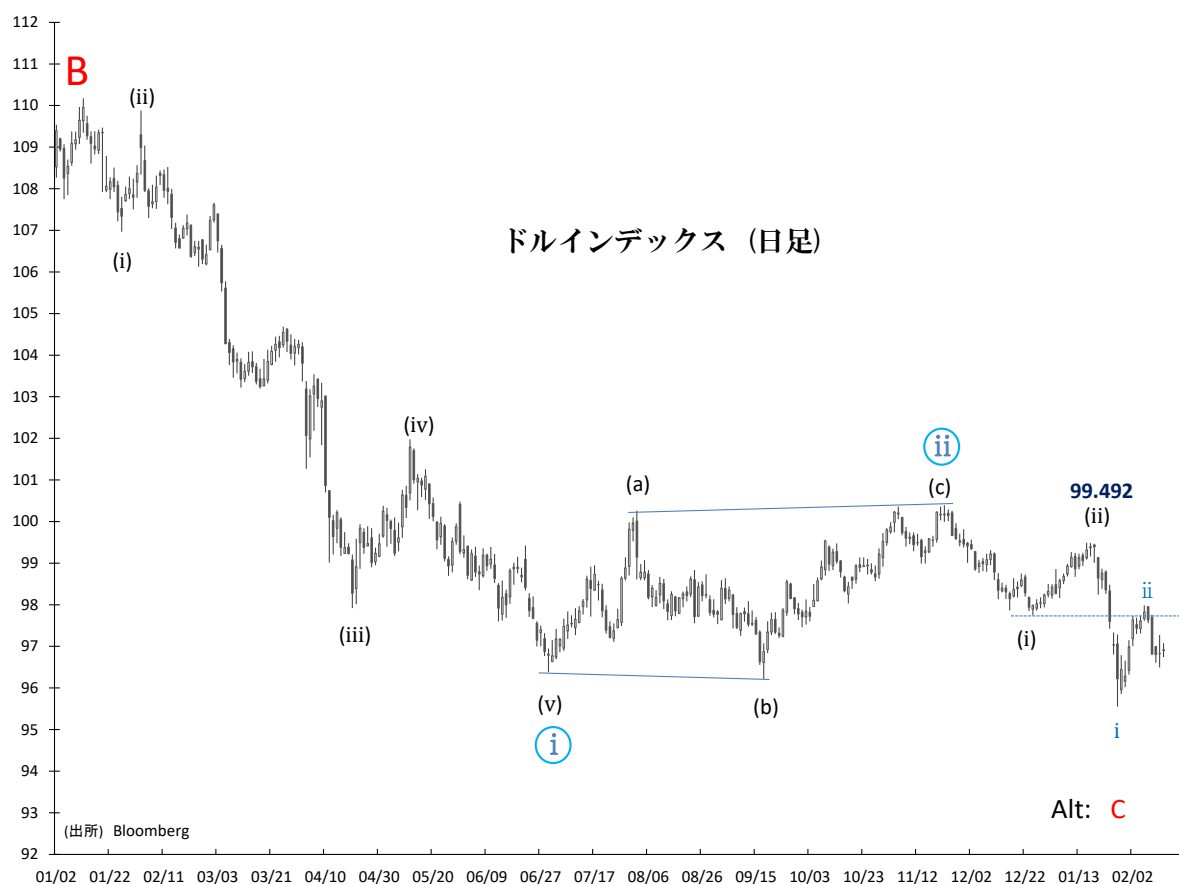
### 【エリオット波動分析】

25 年 1 月からのドル安(C 波)はまだ展開中とみています。先々 C 波のスケールは、22 年 9 月～23 年 7 月のドル安 A 波を凌駕し、A 波の 1.618 倍～2.618 倍に拡大する可能性があります。

95.551(1/27 安値)からの第 ii 波リバウンドは、97.986(2/5)で終わったかもしれません。

そうであれば、短期的にもドル安は加速し 95.551 を大きく下回ることでしょう。

その反面、今後も反発基調が継続し一時的にも 99.492(1/15)を上回ると、昨年 11 月からのドル安は三波構成になってしまいます。そうなると現行のドル安シナリオは撤回され、別のシナリオ(中長期のドル高)を検討する必要があります。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できるとされる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。



## 当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

---

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会  
株式会社マネースクエア

---